演奏会 **古楽の愉しみIII** 5/31㊏ 14:00～15:00（開場 13:00）

丸山友裕（リコーダー）・**白澤 亨**（リュート他）・**丸山洋子**（チェンバロ）

曲目：J.S. バッハ G 線上のアリア、ビバルディ 四季より「冬」他

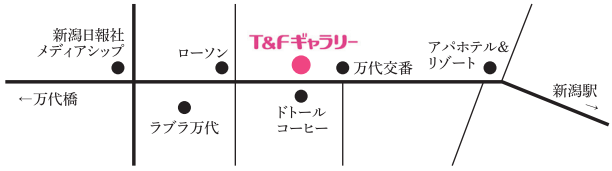
料金：一般 2,000円／大学・高校生 1,000円／中学生以下無料（未就学児は不可）

会場：T&Fギャラリー　定員：60 名　要予約

問合せ（申込み）：tf-gallery@tempstaff-forum.co.jp　025-290-7011

※演奏会日は、一般公開はありません。ご予約の方のみ入場とさせていただきます。

有元利夫《春》リトグラフ
ⓒYOKO ARIMOTO



T&Fギャラリー

〒950-0088
新潟市中央区万代4丁目1－6 新潟あおばビル1F
TEL 025-290-7011 https://tf-gallery.com
開館時間 10:00～13:00（最終入館 12:30）
14:00～17:30（最終入館 17:00）
休館日 月・火・祝　年末年始、お盆

T＆Fギャラリー企画展

安井賞のふたり
鴨居 玲×有元利夫 展

2025/4/23㊌～6/22㊐

開館時間：10:00～13:00（最終入館12:30）
14:00～17:30（最終入館17:00）

休 館 日：月・火・祝（4/29, 5/3～6）

入 館 料：300円（税込）※中学生以下無料

主　　催：T&Fギャラリー

企画協力：中村 玄、楓画廊

鴨居 玲《道化師》油彩

当ギャラリーはテンプスタッフフォーラム株式会社の 35 周年事業として 2023年 4 月にオープン致しました。金沢出身の安井賞作家鴨居 玲の作品を中心とした所蔵作品を多くの方々にご覧いただきたいと願っています。

このたび企画展「安井賞のふたり 鴨居 玲×有元利夫展」を開催いたします。

安井賞展は、1957年安井曾太郎を顕彰し開設され1997年第40回まで開催、新人洋画家の登竜門的存在となりました。鴨居 玲は第12回(1969)「静止した刻」で、有元利夫は第24回(1981)「室内楽」でそれぞれ受賞。時代の流動期にそれぞれ異なる背景で活躍した二人の安井賞作家が織り成す世界観を対比し展観いたします。

最後になりましたが、貴重な作品を快くご出品くださいました有元利夫版画コレクター・中村 玄氏をはじめ、開催にあたりご協力いただいた方々に感謝申し上げます。（主催者）

T&Fギャラリー

《Bar》油彩

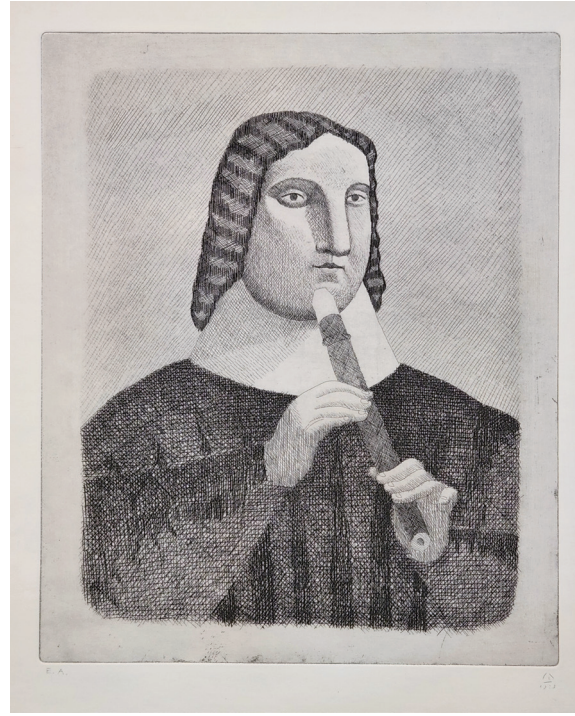
鴨居 玲(1928～1985)は、金沢市に生まれ、旧制金沢中学を経て1946年金沢市立金沢美術工芸専門学校(現 金沢美術工芸大学)へ進学。同じ年に同校の講師となった画家宮本三郎に師事、一時、宮本が属した二紀会に発表し始めますが、自身の絵のスタイルを求めて1959年ヨーロッパへ。1961年に帰国するまでフランスを中心にヨーロッパに滞在します。

1968年に初個展。翌年、第12回安井賞展で「静止した刻」により安井賞を受賞。戦後の経済成長に伴う絵画ブームの真っ只中に、昭和のスター的雰囲気を纏い画壇に登場しますが、1971年にスペインに渡ります。スペインのラ・マンチャ地方にアトリエを構え、その土地の人々をモデルに描き始めます。今展の出品作「Bar」や「私の村の酔っぱらい(虫歯)」などがそれにあたります。

鴨居 玲は、大胆なサービス精神旺盛な一面を見せながらも、時には、道化師の悲哀を見るような、そんな孤独を感じさせることもあった人だったようです。生涯、自身のやり方で、どこまでも精神性や人間の内面を深くとらえようとする画家でした。1984年に心筋梗塞で倒れた後、故坂崎乙郎(美術史家)との対談で死ぬことへの恐怖におののくことがあると語り、「自身の滅びゆく自画像」を「全くうまい方法」と表明。1985年自死、帰らぬ人となりました。(M)

※安井賞展について
安井曾太郎の作風に基づき具象的傾向の作品を対象に美術評論家や学芸員などにより選抜、優秀な新人に毎年 1 名に授与された同賞は「画壇の芥川賞」とも称された。日本の洋画界において作家や美術愛好家たちの注目を集めた。現役作家では絹谷幸二、遠藤彰子、福田美蘭などが受賞。

《私の村の酔っぱらい(虫歯)》油彩



《3人の少女》より エッチング

有元利夫(1946～1985)は、幼少期からゴッホなど西洋絵画に大変興味を持っていたようです。17歳、私立駒込高校2年時に、美術講師として来ていた版画家中林忠良との出会いが、東京藝術大学への進学の大きなきっかけになりました。5回の藝大受験を経験、23歳にして東京藝術大学デザイン科へ入学します。なぜ絵画科でないのか。時は1969年、先だってアメリカではグラフィックアートが全盛の頃です。先見性があったのでしょう。卒業後は電通にデザイナーとして入社します。

藝大2年終了時にヨーロッパへ。フレスコ画や壁画などに感銘を受けると同時に、日本の仏画に共通点を見出します。その時の体験は卒業制作「私にとってのピエロ・デラ・フランチェスカ」の連作10点に昇華され、〈風化〉や〈古色〉を想起させる独自の画風が生まれていきます。

1975年、29歳の時に初個展をみゆき画廊(銀座)にて開催。その翌年、3年勤めた電通を退社し、画業に専念します。1978年第21回安井賞展に出品、「花降る日」で安井賞特別賞を受賞。3年後、第24回安井賞展で「室内楽」により安井賞を受賞。如何に期待の大型新人だったことか。順風満帆と見えた画業も、1985年38歳の若さで急逝、ついえてしまいます。371点のタブローと今展の出品作「春」(1981)などの数多くの版画作品に加え、ドローイング、立体作品を遺しました。(M)